

## 廢院の怪

十七歳になつた光源氏は、五月雨の降る宮中での宿直の夜、頭中将（正妻葵の上の実兄）たちと女性論を交わした。父帝の妃藤壺宮への秘めた思いに悩む光源氏は、この「雨夜の品定め」によつて中流階級の女性へ関心を抱く。そんな折、夕顔の白い花が咲く粗末な家に女（夕顔）が住んでいることを知った。頭中将ゆかりの女性かと思ひながらも互いの素性を明かさぬまま、光源氏は乳母子惟光の手引きで女のもとに通い始める。八月十五日の夜夕顔の家で過ごした光源氏は、夕顔をひそかに近くの荒れ果てた廢院に連れ出した。うちとけた無邪気な様子を見せる夕顔を見るにつけ、光源氏は以前のからの通い所である六条御息所（前春宮妃）との氣づまりな關係を思ひ比べるのだった。

宵過ぐるほど、すこし寝入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、「おのがいとめでたしと見奉るをば尋ね思ほさで、かく異なることなき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ。」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見給ふ。物に襲はるる心地して、驚き給へれば、灯も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きてうち置き給ひて、右近を起こし給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参り寄れり。「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ。」とのたまへば、「いかでかまからむ、暗うて。」と言へば、「あな若々し。」とうち笑ひ給ひて、手を叩き給へば、山彦の答ふる声いと疎まし。人え聞きつけて参らぬに、この女君いみじくわなき惑ひて、いかさまにせむと思へり。汗もしどどになりて、我かの気色なり。「もの怖ぢをなむわりなくせさせ給ふ本性にて、いかに思さるるにか。」と右近も聞こゆ。いと弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほしと思して、「我人を起こさむ。手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く。」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開け給へれば、渡殿の灯も消えにけり。風すこしうち吹きたるに、人はすくなくて、候ふかぎり皆寝たり。この院の預かりの子、睦ましく使ひ給ふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、「紙燭さして参れ。隨身も弦打ちして絶えず声づくれと仰せよ。人離れたる所に心とけて寝ぬるものか。惟光朝臣の来たりつらむは。」と問はせ給へば、「候ひつれど仰せ言もなし、暁に御迎へに参るべき由申してなむ、まかで侍りぬる。」と聞こゆ。このかう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火危ふし。」と言ふ言ふ、預かりが曹司の方に去ぬなり。内裏を思しやりて、名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直奏し今こそ、と推しはかり給ふは、まだいたう更けぬにこそは。

帰り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥したり。「こはなぞ、あなもの狂ほしもの怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのものの人おびやかさむとて、け恐ろしう思はするならむ。まろあれば、さやうのものにはおどされじ。」とて引き起こし給ふ。「いとうたて乱り心地の悪しう侍れば、うつ伏し臥して侍るや。御前にこそわりなく

思さるらめ。」と言へば、「そよ、などかうは。」とてかい探り給ふに息もせず。引き動かし給へど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめりと、せむ方なき心地し給ふ。紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ。」とのたまふ。例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬつつましさに、長押にもえのぼらず。「なほ持て来や。所に従ひてこそ。」とて、召し寄せて見給へば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、まづ、この人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られ給はず添ひ臥して、「やや。」と驚かし給へど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶え果てにけり。言はむ方なし。頼もしくいかにと言ひふれ給ふべき人もなし。法師などをこそはかかる方の頼もしきものには思すべけれど。さこそ強がり給へど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見給ふに、やる方なくて、つと抱きて、「あが君、生き出で給へ、いとみじき目な見せ給ひそ。」とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひもの疎くなりゆく。右近は、ただあなむつかしと思ひける心地みな覚めて、泣き惑ふさまといとみじ。南殿の鬼のながしの大官おびやかしける例を思し出でて、心強く、「さりともいたづらになり果て給はじ。夜の声はおどろおどろし。あなかま。」と諫め給ひて、いとあわただしきにあきたる心地し給ふ。

(夕顔)

【口語訳】

宵の時分を過ぎる頃、（光源氏が）少しお眠りになっていると、枕もとにたいへん美しい様子の女が座って、「私が（あなた様）「光源氏」を）たいへん立派だとお慕い申し上げている、その私を（あなた様は）訪ねようとお思いにならず、このような格別なとりえもない人（夕顔）を連れておいでになってご寵愛なさるのが、たいそう不愉快でつろうございませぬ。」と言って、この（光源氏の）おそばに寝ている人（夕顔）を抱き起こそうとすると（夢に）ご覧になる。（光源氏は）ものに襲われたような心地がして、はっと目を覚まされたところ、明かりも消えてしまっていた。自然と気味が悪くお思いになったので、（魔除けのために）護身用の太刀を引き抜いて（傍らに）お置きになって、右近をお起こしになる。これ（右近）も恐ろしいことと思っている様子で（光源氏の）おそば近くに参上した。「渡殿にいる宿直の者を起こして、紙燭をともして参れと言いなさい。」と（右近に）おっしゃると、「どうして退出しましょうか（、できませぬ）、暗くて。」と言うので、「おやおや、子どもっぽい。」とお笑いになって、手をおたたきになると、こだまがこたえる音がひどく気味が悪い。誰も聞きつけることができないで参上しないうえ、この女君（夕顔）はたいそうひどく震えうろたえて、どうしようと思っている。汗もびっしょりになって、茫然自失し、生気を失った状態である。「夕顔様は）もの怖がりをむやみになさるご性質ですので、どんなに（恐ろしく）お思いになっているでしょうか。」と右近も（光源氏に）申し上げる。（光源氏も夕顔が）ひどくか弱くて、昼間もただ空ばかりを眺めていたのに、かわいそうなこととお思いになって、（光源氏は）「私が（行って）人を起こしてこよう。手をたたくとこだまがこたえるのが、実に煩わしい。ここに、ちよつとの間、そばに（いてくれ）。」とおっしゃって、右近を（夕顔のそばに）引き寄せなさって、（光源氏は）西の妻戸に出て、戸を押し開けなかつたところ、渡殿の明かりも消えてしまっていた。風が少し吹いているうえに、（宿直の）人は少なく、お仕えする人は全て皆寝込んでいる。この院の管理人の子で、（光源氏が）親しく召し使っておいでになる若い男と、殿上童一人と、（それに）いつもの（お供をしている）隨身（の三人）だけがいた。お呼びになると、（管理人の子が）お返事をして起きてきたので、「紙燭をともして持って参れ。隨身も弦打ちして絶えず警戒の声をたてよと言いつけよ。（こんな）人氣のない所で気を許して寝ていてよいものか。惟光朝臣が来ていただろうが（どうしたか）。」とお尋ねになると、「伺候していましたがご命令もない、暁にお迎えに参上しようという旨を申して、退出いたしました。」と申し上げる。このこう申し上げる者（管理人の子）は、滝口の武士であったので、弓の弦をたいそう（この場に）ふさわしく打ち鳴らして、「火の用心。」と言いい、管理人の部屋の方へ去って行くようだ。（光源氏はこの声を聞いて、）宮中に思いをはせられ、（今ごろは）名対面は過ぎただろう、宿直の滝口の武士の点呼はちょうど今ごろだろう、と推し量りなさるのは、まだあまり夜が更けていないのだろう。

（光源氏がもとの場所へ）引き返して手探りなされると、女君（夕顔）はもとのままの状態であって、右近が（その）そばにうつ伏せになっている。「これは何ごとか、ああ見苦しいほどの怖がりようだなあ。荒れ果てている所は、狐などのようなものが人を脅かそうとして、恐ろしく思わせるのだろう。私が（ついて）いるからには、そんなものには脅されぬぞ。」とおっしゃって（右近を）引き起こしなさる。（右近は）「（私は）たいそう気味悪く取り乱した気分がすぐれませぬので、うつ伏せになっていたのをごさいますよ。ご主人様（夕顔）におかれてはむやみに怖がっていらっしやるでしょう。」と言うので、（光源氏は）「そうそう、（夕顔は）どうしてこんなに（恐れるのか）。」と言って手探りで探られると息もしていない。引き動かしなかつても、ぐったりとして、正体もないありさまなので、たいそうひどく子どもっぽい人なので、物の怪に正気を奪われてしまったようだと、どうしようもないお気持ちになさる。（そこに管理人の子が）紙燭を持って参上した。右近も動けそうな様子でもないの、（光源氏は自ら）そばの御几帳を引き寄せて（夕顔を隠し）、「もつと近くに持って参れ。」とおっしゃる。ふだんはないことなので、（恐れ多く、光源氏の）おそば近くにも（管理人の子は）参上できない遠慮深さのため、（簀子と廂の間の）敷居にも上がることができない。「もつと近くへ持ってこい。遠慮も場所次第だ。」とおっしゃって、（紙燭を）お取り寄せになってご覧になると、ちようどの（夕顔の）枕もとに（先ほど）夢に現れた容貌をしている女が、幻に見えてすつとかき消えてしまった。昔物語などごそここういう話は聞いているが、とたいそう意外で気味が悪いけれど、まず、この人（夕顔）がどうなったかとお思いになれぬ心配の胸騒ぎに、自分（光源氏）の身の上について（何か厄介が起るかもしれないということも）お考えになれないで（夕顔に）添い寝して、「これこれ。」とお起こしなさるけれども、（夕顔は）ひたすら冷たくなっていて、息はとづくに絶え果ててしまっていた。（光源氏は）なんとも言いようがない。（ここには）頼みがいがあって、どうしたらいいかと話しかけなせることのできる人もいない。法師などごそここういう方面での頼りになるものとお思いになるはずだけれども。（光源氏は）あんなに強がっていらっしやるけれど、（まだ）若いお心で、（夕顔が）どうしようも

なくなってしまったのをご覧になると、どうしようもなく、（夕顔を）ひとき抱いて、「いとしい人よ、どうか生き返ってください、（私に）ひどく悲しい目をお見せにならないでください。」とおっしゃるが、（夕顔は体温も）冷えきってしまったので、様子がうす気味悪くなっていく。右近は、ただああ気味が悪いと思っていた気持ちがすつかり覚めて、激しく泣いて取り乱す様子は実に甚だしい。紫宸殿の鬼が某大臣を脅かした（が、反対に追い払われた）例をおい出しになって、心強く（思われ）、「それでもむなしく死んでしまわれることはないだろう。夜の声は大きさに響く。しっ、静かに。」と制止なさって、たいそう突然のできごとに途方に暮れている気持ちがなさる。